

学校名	みやき町立中原中学校		
1 前年度 評価結果の概要	・保護者、生徒アンケートでは、すべての項目について肯定的な回答が過半数であり、好意的な評価を得ている。 ・校内研究を中心として、学びに向かう力を高める指導方法の工夫のため、評価方法の充実をめざしてながら、重点目標達成に向けた共通した教育実践を行うことができた。 ・教職員の働き方改革の推進のため、衛生管理委員会等を活用し業務の見直しを図ることで、全職員が意識した取り組みを行うことができた。 ・次年度も継続して、指導と評価の一体化を目指した授業改善や開発的生徒指導、道徳教育の充実、また働き方改革に全職員で取り組みたい。		
2 学校教育目標	ふるさと中原を創る志をもった生徒の育成 ～自律・協働・挑戦をキーワードとした学校づくりを通して～		
3 本年度の重点目標	○ 生徒一人一人に「自己指導能力」を身につけさせる生徒指導の推進 ○ 「地域とともにある学校」の具現化（コミュニティ・スクール元年） ○ 学力向上のための取組の充実・発展 ○ 道徳科を中心とした豊かな心の育成 ○ 切れ目のない生徒の学びを保障する「安全・安心」な教育環境づくり		

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目							
重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○学びに向かう力を高める指導方法の工夫と授業の実践	○12月に行う生徒アンケートにおいて「主体的に学習に取り組む態度」で肯定的な回答をした生徒80％以上 ○「学習用PCを使って、主体的に授業に参加することができた」で肯定的な回答をした生徒80％以上、「学習用PCを積極的に活用した」で肯定的な回答をした教師90％以上	・校内研究会での取組を、自らの日々の授業実践や自己評価に生かす。 ・学びに向かう力を高めるために、校内研究会において、各教科の実践例を紹介し、取組の促進を図る。	A	・生徒アンケートの「主体的に学習に取り組む態度」の項目において肯定的な回答をした生徒91.9％ ・校内研究での授業づくり部会においては「課題」「評価」の研究を進めた。 ・生徒アンケートの「学習用PCを使って、主体的に授業に参加することができた」の項目において肯定的な回答をした生徒73.8％ ・教師アンケートの「学習用PCを積極的に活用した」の項目で肯定的な回答をした教師66.5％ ・学習用PCの活用において、生徒においては、ばらつきはあるものの多くの教科で数値が向上していた。教師においては、2学期より本格的に実践的な活動を中心に研究を行った。	A	・授業の様子を見ても、生徒が落ち着いて学習している。 ・ICTを活用して、生徒の意欲を高める授業が展開されている。 ・継続して取り組んでほしい。
	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○アンケート調査で「いじめ・差別・暴力のない学校」と回答をした生徒90％以上 ○アンケート調査で「友だちに思いやりの心をもって行動している」の項目で肯定的な回答をした生徒90％以上	・年度初めに全クラスでいじめに関する道徳・学活の授業に取り組む。 ・人権週間(人権集会)や「いのち・生き方を考える日」では、生徒主体の取組を行い、生徒部会において全校でいじめ撲滅宣言を唱和し、生徒や教職員の「権感覚を磨く」。 ・QUTテストの結果をもとに個別に支援を行い、学級満足群のポイントを上げ、学級に対する誇りをもつ。	A	・生徒アンケートの「いじめ・差別・暴力のない学校」の項目において肯定的な回答をした生徒85.4％ ・生徒アンケートの「友達に思いやりの心をもって行動している」の項目において肯定的な回答をした生徒95.6％ ・1年生での道徳の授業「いじめと探偵」において、絵本の読み聞かせとともにその内容を全校に伝えることができた。 ・「いのち・生き方を考える日」の取組として、いじめを題材とした絵本の読み聞かせを行った。 ・いじめ撲滅宣言を毎月、唱和することや宣言を学活ノートに貼ることで、常に宣言内容を意識できる状況を整えた。 ・人権週間(集会)では、朝の人権放送や「私の行動宣言」の記入を通して、人権の大切さや自分の生き方について振り返らせることができた。また、集会では、あいさつをテーマに取り組み、あいさつの大切さや素晴らしさを案	A	・生徒が安心して活動できる環境を教師が作っている。 ・多角的な視点から人権教育に取り組めている。 ・継続して取り組んでほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○アンケート調査で「いじめ・差別・暴力がない学校になること」を目指して指導している」と回答した教員90％以上 ○アンケート調査で「生徒に「役割・出番」を与え、「承認」すること意識した指導を行っている」と回答した教員80％以上	・学年経営・学級経営を通して、いじめを発生させない雰囲気づくりに努める。 ・道徳の授業を通し、道徳性を育成する。 ・学校行事や生徒会活動で生徒がより主体的に取り組む場を用意し、「役割・出番」「承認」「成長」というサイクルを実践することにより、生徒に達成感・成就感、自己肯定感をもたせる。 ・発達支持的生徒指導の推進を図り、主体的な選択や決定を促し、自己指導能力を身に付けさせる。	A	・生活アンケートの実施や生徒指導会議を通して、生徒の情報共有を図り、いじめの早期発見に努めることができた。いじめ対策委員会は現在で、11回開催し諸対応を協議することができた。 ・各学校行事において、すべての教員が生徒の出番や役割を増やした活動を行うよう指導できたが、生徒の意識では89％と認識の差がある。 ・発達支持的生徒指導の推進を図り、主体的な選択や決定を促し、自己指導能力を身に付けさせることに關しては、具体的な活動例等の提示を行わなかったため、組織的な実施を行うことができなかった。来年度は実施していきたい。	A	・いじめの未然防止、早期対応、早期発見、再発防止に組織的に取り組めている。 ・保護者が相談しやすい雰囲気や教師が作っている。また、保護者との信頼関係が築けている。 ・継続して取り組んでほしい。
●心の教育	●◎生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	◎「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒70％以上 ◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒70％以上	・学級活動や総合的な学習の時間等で、生徒に夢や目標について自ら考えさせる場面を設定する。 ・「ナメー活動(中原ふれあい教育を進める会)を中心に、地域との触れ合いを深める。 ・コロナ禍において工夫を行いながら各種行事を実施し、生徒が活躍できる機会を保障する。 ・学級活動や総合的な学習の時間等で、生徒に夢や目標について自ら考えさせる場面を設定する。 ・各種行事を実施し、生徒が活躍できる機会を保障する。 ・各種体験活動では、生徒に活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。	A	・生徒アンケートの「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」の項目について肯定的な回答をした生徒89.7％ ・生徒アンケートの「将来の夢や目標を持っている」の項目について肯定的な回答をした生徒87.5％ ・今年度は、2年生の「職場体験」を実施することができ、生徒が自分の将来や現在について考えるという機会をもつことができた。 ・「ナメー活動や平和集会、文化発表会などにおいて、住んでいる地域や地域の人々とのふれあいを深めることができた。	A	・職場体験学習など、地域と連携した進路学習ができるようになったことは良かった。 ・先生と生徒の信頼関係がしっかりと築けている。 ・学校運営協議会等とも協力して、地域や保護者がより深く生徒に関わり、そのことが生徒の成長につながってほしい。
	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に良い食事をしている」児童生徒80％以上 ●「早寝・早起き・朝ごはん」を呼びかけ、生徒達成率80％以上、保護者達成率90％ ●給食後の歯みがきの励行を呼びかけ、生徒の達成率80％以上	・集会等で「早寝・早起き・朝ごはん」の重要性について保健指導を行う。 ・保健便りや掲示物等で啓発する。 ・各学年・学級に「健康に良い食事をする」をテーマにした掲示物を掲示し、生徒に個別に保健指導を行う。 ・生徒会で食後の歯みがきを呼びかける。 ・歯科衛生士による歯みがき講話を行う。	A	・「健康に良い食事をしている」生徒は81％で目標の80％を達成することができた。 ・生徒及び保護者アンケートの「早寝・早起き・朝ごはんの呼びかけ」の項目において、肯定的な回答をした生徒81％、保護者87.5％ ・保健だよりにてアンケートの結果をグラフで載せ、生徒にできるだけ分かりやすい啓発になるよう掛けた。 ・保健室来室者だけではなく、全校生徒に対して生活習慣が乱れないように呼びかけや保健指導を行った。 ・朝食の喫食率は93％で目標の80％を達成することができた。 ・23時まで食べたのは52％、23時以降に食べた生徒は34％だった。 ・給食後の歯磨きは感染の恐れがあるため励行の呼びかけは感染症が落ち着き次第行う予定である。 ・3学期に1年生を対象に歯科衛生士による「歯の健康講話」を行ったことで歯に関する健康の意識を高めることができた。	A	・生徒の基本的な生活習慣についての現状を理解できた。 ・生活習慣が様々なことに影響を及ぼすので、今後も継続して実態把握や指導、改善に取り組んでほしい。
	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教員委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する	・週1回の定時退勤日を月曜日と設定する。 ・夏季休業中及び冬季休業中に学校開庁日を設定する。 ・週2回、部活動休業日を設定する。 ・業務の効率化を図るために、職員間で協議する意識をもつ。	A	・教職員の時間外勤務は、月平均36.4時間であった。時間外在校等時間の上限、1箇月について45時間以内とすることができた。 ・週1回の定時退勤日を月曜日と定め、週2回の部活動休業日の徹底を図った。 ・担当者が見通しをもち業務を進行することができるよう、計画的に業務内容を提案することができた。 ・学校開庁日を夏季休業は7日間、冬季休業は6日間設定した。	A	・業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減に向けて、よく取り組んでいる。 ・コミュニティ・スクール等で外部人材を活用するなど、教師の負担を減らしてほしい。 ・PTA改革も教師の負担減につながっていくと思われる。 ・更なる改善に向けて、今後も継続して取り組んでほしい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○校務等の効率化の促進	○各分掌の業務が組織的に分担して遂行できていると回答する教職員70％以上 ○教職員の時間外勤務について、前年度と同等とする	・各分掌の業務を主任(チーフ)に伝え、人材育成の視点をもちながら分掌メンバーで分担して遂行するように呼びかける。 ・電子伝言等を活用して、ペーパーレス化を図る。 ・各教職員の勤務時間を把握し、衛生管理委員会を活用しながら、時間外勤務が多い教職員を面談するなどして、原因と解決方法を探る。	B	・教師アンケートの「各分掌の業務が組織的に分担して遂行できている」の項目で肯定的な回答をした教員は70％。業務に偏りがあるものがあるため、来年度に改善を図る必要がある。 ・教職員の時間外勤務は、月平均36.4時間であった。前年度と同程度である。 ・年2回の衛生管理委員会を開き、時間外勤務が多い教職員についての把握をし、業務等の見直しを行った。	A	・コミュニティ・スクール等で外部人材を活用するなど、教師の負担を減らしてほしい。 ・教師の負担軽減に向けて、今後も継続して取り組んでほしい。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目							
重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
○生徒指導	○生徒指導・教育相談体制の充実	○教育活動の中に、開発的生徒指導の手法を積極的に取り入れ、アンケート調査で「生徒に「役割・出番」を与え、「承認」すること意識した指導を行っている」と回答した教員80％以上 ○生徒の課題解決・自己実現に向け、年2回の教育相談の実施 ○生徒の情報交換を密にするため、組織力を強化し、週1回の生徒指導委員会と月1回の生徒指導協議会の実施 ○学期ごとのスクリーニング会議の開催	・節目節目の黄金の1週間や、「役割・出番」「承認」「成長」というサイクルを教育活動全体で実践する。 ・年2回の教育相談を実施するとともに、気軽に相談できる雰囲気づくりに努め、不適応や不安を抱えた生徒の早期発見に努める。 ・SCやSSWおよび関係機関と連携し、早期に対応する。 ・毎週生徒指導委員会を開催し、SCやSSWにも参加してもらい、生徒の情報交換を密に行うことにより早期解決を図る。 ・スクリーニング会議を開くことで、要配慮生徒の把握や支援についての共通理解を図る。	B	・教師アンケートの「生徒に「役割・出番」を与え、「承認」すること意識した指導を行っている」の項目で、肯定的な回答した教員100％ ・各生徒指導会議を定期的に開催し、共通理解を図ることができた。 ・スクリーニング会議を開くことはできたが、会議結果の活用について課題である。 ・職員の初期対応について、再度確認が必要である。 ・SSWを活用し、生徒の様子や保護者の思いなど細かい部分まで把握する機会が増え、連携を取ることができている。 ・病院などの外部機関と保護者に直接紹介してもらい、早急に診断を受けることができた。 ・6月と10月に全校生徒に教育相談週間を実施した。日頃から学年職員や教育相談担当、部活動顧問等で連携をし、気になる生徒の把握と情報の共有及び支援をチームで取り組むようになっている。 ・不登校傾向のある生徒には、定期的に家庭訪問を行うなどして関係づくりをし、SCやSSW、関係機関と連携し早期に対応している。 ・不登校傾向が著する増えたので、新たな取組が必要と考える。 ・SSFの協力により、教育相談部会の研修を開催し、不登校の現代の傾向や生徒への対応などについて、教育相談担当職員がより詳しく学ぶことができた。	B	・生徒の主体性を大切にしながら指導にあたっている。そのことが生徒の成長につながっていると考えられる。 ・外部人材や他機関との連携を密にして、生徒の指導にあたっている。 ・学校を取り巻く状況が変化し、不登校生徒の増加やその対応が大変だと思われるが、保護者とも連携を取りながら、学校として組織的に対応していったほしい。
	○特別支援教育の充実	○年間3回、特別支援教育の職員研修の実施 ○特別支援教育についてのセンター研修内容の共有 ○月1回の生徒指導協議会での情報共有 ○教室のUD化実施(一昨年度の校内研の内容を継続する) ○関係機関との情報共有と支援内容の充実	・特別支援教育の研修においては、個別的教育支援計画、個別の指導計画の書き方、進捗確認の対応などについての内容を学ぶ。 ・コーディネーターが受けた研修の資料を回覧するなどして、研修内容の共有を図る。 ・生徒指導協議会において、情報を共有し、共通理解を図るとともに、特別支援教育の推進への支援の方法などを共通理解し共通実践する。 ・全教室(掲示物は後方に貼る)や授業内でのUD化(授業内のあてやまとめ、学習内容・流れを視覚的に示す)を図る。 ・SC、SSW、SSF、関係機関、巡回相談員、エリアリーダーなどの関係機関との情報共有をし、支援内容の充実を図る。	B	・1月に生徒1名を対象に巡回相談を利用し、学年主任、担任、コーディネーターが指導・助言を上げることができた。 ・巡回相談で得た情報を担任を通して共有することができた。 ・研修で得た情報を回覧で共有することができた。 ・UDについては、資料の提示等を行ったが、徹底できない部分もあった。 ・研修については、本年度1回の実施にとどまった。来年度は少なくとも2回は行ってほしい。	B	・様々な機関との連携や、学校での組織的な対応により、生徒の特性に応じた指導ができています。 ・今後も更に特別支援教育に対する理解を深めてほしい。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	・2月に学校評価アンケートを実施した。保護者及び生徒アンケートでは、すべての項目について肯定的な回答が過半数であり、おおむね好意的な評価を得ることができた。 ・コミュニティ・スクール初年度にあたり、コロナ禍で薄れていた地域や保護者と連携した活動を、コミュニティ・スクール活動の一環として再考し、実施できた。 ・本校の課題である不登校生徒への対応において、別室(スペシャルサポートルーム)の設置や、他機関との連携、職員の組織的な取組など、大きく前進した。 ・教職員の働き方改革の推進のため、衛生管理委員会等を活用し、業務の見直しを図ることで全職員が意識した取組を行うことができた。 ・次年度も継続して、主体的な学びに向けた授業改善、特別支援教育や不登校生徒への対応を含めた生徒指導、PTA改革、働き方改革に全職員で取り組みたい。
--------------------	---